

私たちの常識は正しいのか

「話をするときには、相手の目を見て話して当たり前」、「姿勢よく授業に臨むのは当たり前」、「教師が出した複数の指示は実行できて当たり前」、「黒板に書かれたものはノートに書き写すことができて当たり前」、「家で話ができるのなら、学校でも話ができる当たり前」というように、あなたは、これらを常識だと思ってはいないでしょうか。確かに、多くの子どもたちにとっては、上記に示したことはできて当たり前にできることでしょう。しかし、特別支援教育を考えると、この常識を疑うことから考えなくてはならないと思うのです。特別な支援を必要とする子どもが通常の学級に6.5%いると教師は感じているのです。教師が感じているのは、上記のような常識に当てはまらない子どもたちの存在に他ならないのです。つまり、教師側の常識では理解できない子どもがいる事実なのです。

ASDの傾向のある子どもの中には、相手の目を見て話すことが苦手な子どもがいます。ADHDの傾向のある子どもの中には、体を動かしているときの方が集中できる子どもがいます。ワーキングメモリーが小さい子どもの中には、教師からの指示は聞いていても、それを憶えられず、実行できない子どもがいます。書字が苦手な子どもの中には、黒板に書いてある文字をノートに写す際に時間がかかりすぎて、授業についていけない子どもがいます。場面緘黙の傾向がある子どもの中には、家では話ができても学校ではできない子どもがいます。

ちょっと例を上げて考えてみましょう。授業中に時々先生が「はい、書いている人は鉛筆を置いてこっちを見てください」と言います。特に書字に課題を抱えている子どもの場合は、途中で鉛筆を置くこととなります。ノートは完成されていないということになります。鉛筆を置かずに書き続けていたら先生からの指導が入るでしょう。途中でも置かなくてはならないのです。繰り返しますが、その子のノートは未完成です。

さて、その子どものその後のノートはどうなるのでしょうか？果たして完成させることができているのでしょうか。その後誰かに見せてもらって書けているに違いないなどと思っていないでしょうか。書けていないのは子どものせいだとしていないでしょうか。どうやって情報保証しているのでしょうか。

ここで教師に求められるのは、自分のもつ常識に当てはまらない子どもの存在を認めることだと思います。なぜならば、先に述べた常識の中で判断してしまうと、できないのは子どもの問題と考え、悪いのは子どもと責任を押しつけてしまい、自身の関わり方や教材の工夫といった、学習環境を整えるということには考えが至らないと思われるからです。自分の持つ常識の範疇で収まりきらない子どもがいる事実を認め、その子どもたちの障壁にならないような学習環境を考えることが、子どもたちの学習意欲を育てることになるのではないかと思います。

～坂井聡先生の紹介～

((プロフィール))

香川大学教育学部卒業 金沢大学大学院教育学研究科修了、香川大学教育学部附属養護学校など養護学校教諭を経て、現在香川大学教育学部障害児教育コース准教授。1997年には自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞。2013年より教授に就任。